

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00483

研究課題名(和文) 共同行動の政治哲学と群れの科学に基づくヴァイマル共和国期の群集表象の言説史的研究

研究課題名(英文) A historical examination of the discourses and representations of the masses in the Weimar Republic in light of political philosophy and science of swarm behavior.

研究代表者

海老根 剛 (Ebine, Takeshi)

大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00419673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主題は、21世紀初頭以降に政治哲学および自然科学の分野で急速な発展を遂げた集団や群れの行動に関する理論的知見にもとづいて、ドイツ・ヴァイマル共和国時代の文学作品の群集表象を新たな角度から分析することであった。本研究期間に申請者は、そうした理論的知見がヴァイマル共和国時代の思想や文学を規定していた20世紀的な群集の概念をいかなる点で相対化するものであるのかを明らかにし、それらの知見が提供する集団の舞いについての新しい見方のもとでヴァイマル共和国時代の小説作品に表れる群集の表象を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2000年頃からドイツ文学研究の分野でも群集という主題に対する注目が高まっており、作家論的研究や通史的研究がすでになされてきた。しかしながらヴァイマル共和国時代の文学作品における群集表象の分析においては、ル・ボンの群集心理学を参照点とする研究がほとんどであり、群集心理学の枠組みを相対化する今日的な観点から群集表象を捉え直す研究はまだ存在していなかった。また群集心理学に依拠することで、ヴァイマル共和国時代の群集表象の多様性と歴史の変転を捉えることもできていなかった。本研究は新たな観点から群集表象を捉え直し、政治哲学の蜂起論と自己組織的な群れの理論を応用することで群集表象の多様性を明確化している。

研究成果の概要(英文)：The subject of this study was to analyze the representations of the masses in the literary works of the Weimar Republic from a new angle, based on the theoretical findings on group behavior that have been rapidly developing in political philosophy and the natural sciences since the beginning of the 21st century.

In the course of this research, the author sought to clarify the ways in which these theoretical findings reframe the twentieth-century concept of the mass that defined Weimar Republican thought and literature. He also analyzed the representations of the mass in Weimar Republican novels from this new perspective on the collective behavior.

研究分野：ドイツ文学、表象文化論

キーワード：群集 ヴァイマル共和国 都市文学 政治哲学 群れの科学

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景をなしていたのは、2000年代以降、二つの分野で発展した集団の行動に関する理論的研究であった。第一の理論的發展として挙げられるのは、2000年以降に世界各地で展開した新自由主義的グローバル化に対する抗議行動を背景に、政治哲学の分野で集団的な政治行動の主体をめぐる議論が活性化したことである。特に2010年以降になると、「集会」や「蜂起」といった人々の「共同行動」(acting in concert)そのものを考察する理論が登場する。第二の理論的發展は、動物や人間の集団行動を「群れ」の振舞いとして研究する複雑系の科学の分野でなされた。こうした研究では、群れの高度に複雑な振舞いが、個体間のローカルな関係を律する少数のルールだけから創発しており、中枢的な制御や階層的秩序化は必要とされないとされる。これらの理論的知見は、20世紀の政治的・文化的思考を規定した群集をめぐる思考をラディカルに問い直すものであり、集団の振る舞いを理解する新しい枠組みを提供している。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、2000年以降に政治哲学および複雑性の科学の分野でそれぞれ別個に急速な発展を遂げてきた集団や群れの行動に関する理論的知見を、ドイツ・ヴァイマル共和国時代の群集表象の言説的分析に導入することで、当時の群集をめぐる言説を規定していた理論的枠組みの特徴を明らかにするとともに、文学作品に描かれた群集表象を新たな角度から分析することであった。具体的には、(1)歴史的な脈に即した群集表象の形成と展開の考察を通して、当時の群集をめぐる言説の理論的枠組みの特徴と変遷を明らかにし、群集表象の視点からヴァイマル共和国における文学表現の展開を再構成すること、および(2)学問的言説と文学作品の相互作用を解明し、支配的な思考の枠組みから時に逸脱する文学的实践を考察することである。

### 3. 研究の方法

方法論的には、対象となる時代と地域をドイツ・ヴァイマル共和国時代に限定しつつ、学問的言説と文学作品を横断的視点から考察する言説史の手法を用いる。ヴァイマル共和国時代の言説において「群集」として概念化されていた対象や、群集の振舞いとして記述されていた行動を、従来とは異なる概念的枠組みから把握する新しい理論的知見を参照することで、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説を規定していた思考の枠組みを明らかにし、文学作品の群集表象にしばしば見られる両義性を、支配的思考への抵抗として読み解くことを試みる。

### 4. 研究成果

以下、主要な研究成果の概要を示す。

(1)「エリアス・カネッティ再考：『群集と権力』とヴァイマル共和国時代の群集論」(研究発表)

エリアス・カネッティが1960年に出版した『群集と権力』における群集をめぐる考察を、群集という主題を論じたヴァイマル共和国時代の言説との関係において検討し、両者の間にある連続性と不連続性(断絶)を考察した。発表ではまず群集表象の歴史的分析の前提条件として、文学をも含めた芸術の実践において、群集がいかなる問題として浮上するのかを簡潔に整理した。群集には芸術作品や文学作品の作り手を多様な仕方でも挑発するポテンシャルが備わっている。群集はそれと向き合う者に対して、みずからの知覚と表象の能力の限界を感じさせる存在なのである。この整理に続いて、本発表では、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説のパラダイムを簡潔に確認したうえで、それがカネッティの『群集と権力』における考察とどのような関係を取り結んでいるのかについて、共通点と差異を議論した。

(2)“Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse.”(研究論文)

この発表では本研究課題の主要な問いのひとつであるヴァイマル共和国時代の群集表象のパラダイムの変遷を具体的な文学作品に表れる群集表象の分析にもとづいて提示した。その際、四つの観点に基づいてそれぞれの群集表象の特徴を分析した。それらの観点とは、(1)個人と群集の対置、(2)人間と技術の関係、(3)共同体と社会の両極性、(4)指導者の問題である。具体的には、エルンスト・トラー、ゲオルク・カイザー、ハイデガー、デーブリー、エルンスト・ユンガーの作品を取り上げた。さらに本発表では、今世紀に生じた集団の振る舞いをめぐる理論的認識の転換を指摘し、それがヴァイマル共和国時代の文学作品における群集表象の分析に対してもつ含意を議論した。

(3)「都市/文学/群れ メディウムとしてのインフラストラクチャー」(研究発表)

1920年代中期のドイツの都市小説には、しばしば、大都市の生活に欠かせない移動や通信のイ

ンフラストラクチャーが、主人公の行動と相互作用する環境として描かれる場面が見いだされる。とりわけベルリンを舞台とする都市小説において、技術的なインフラストラクチャーは、主人公の個人として輪郭を不鮮明なものにし、なかば匿名化する要因として機能する。都市の技術的なインフラストラクチャーは、それを利用する膨大な数の人々を個人としてではなく、振舞いのパターンによって把握される統計的存在として扱うからである。そこでは諸個人は、個人であるままで、同時にある程度まで「群れ」化してしまうとすることができる。本発表ではまず、大都市の技術的なインフラストラクチャーをメディアムをとって把握し、19世紀末から1930年代初頭までのドイツ語圏の都市小説をインフラメディア性 *Inframedialität* という概念を用いて分析した先行研究を参照し、そのうえでヴァイマル共和国時代末期のベルリンを舞台としたいいくつかの小説作品を取り上げて、それらの作品において技術的なインフラストラクチャーのメディア的作用がどのように表現されているのかを考察した。

(4) 「ボードレールを読むベンヤミン 『ボードレールの第二帝政期のパリ』の詩編の読解をめぐって」(学会発表)

本発表では、ヴァルター・ベンヤミンが1930年代末に練り上げた大都市と群集をめぐる思考を、ベンヤミンによるボードレールの詩編の読解の分析を通して検討した。ここではベンヤミンが歴史のイメージを構築する方法として用いた引用とモンタージュに注目し、それらの手法を用いてベンヤミンがどのように近代における大都市と群集を考察したのかを考察した。

(5) 「引用の技法と歴史の構築 『ボードレールの第二帝政期のパリ』における詩編の引用と読解」(学会発表)

本発表では、ベンヤミンによるボードレール研究をひとつの歴史記述の試みとして理解し、ベンヤミンがボードレールの詩編の読解を通してどのような方法で歴史的空間としての第二帝政期のパリを構築しているのかを考察した。しばしば歴史哲学の水準で議論されるパサージュ論の方法論の問題を、具体的な歴史資料の扱い方として文学作品の扱いの水準で論じることが目指された。

(6) “Die gesellschaftskritische Interpretation eines Dichters. Poetologische Operationen in der Baudelaire-Marx-Lektüre bei Walter Benjamin.” (研究発表)

本発表では、ヴァルター・ベンヤミンによるボードレールの詩編とマルクスの理論的テキストの読解を取り上げて、それらのテキストの読解を通して19世紀半ばのパリの歴史空間を構築するにあたって、ベンヤミンが投入した修辞学的戦略を分析した。この考察を通して、大都市と群集をめぐるベンヤミンの思考の際立った特徴が明確に示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takeshi Ebine	4. 巻 1
2. 論文標題 Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz.	6. 最初と最後の頁 321-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 海老根剛
2. 発表標題 ボードレールを読むベンヤミン 『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』の詩篇の読解をめぐって
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会東北支部（招待講演）
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 海老根剛
2. 発表標題 都市/文学/群れ - メディウムとしてのインフラストラクチャー
3. 学会等名 大阪市立大学ドイツ文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takeshi Ebine
2. 発表標題 Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse.
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 海老根剛
2. 発表標題 エリアス・カネッティ再考 『群集と権力』とヴァイマル共和国時代の群集論
3. 学会等名 大阪市立大学ドイツ分学会
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Takeshi Ebine
2. 発表標題 Die gesellschaftskritische Interpretation eines Dichters. Poetologische Operationen in der Baudelaire-Marx-Lektüre bei Walter Benjamin.
3. 学会等名 Kulturseminar 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関